

つる かわ かい どう おお やま みち
鶴川街道と大山道稲城市東長沼2111
☎042-378-2111
発行 2005. 1. 31

百村・普寛教会付近の鶴川街道の旧道

鶴川街道は、調布市の甲州街道ぶんきから分岐する部分きてんを起点として、稲城市域を縦断して町田市鶴川まで通じる幹線道路であり、江戸時代以降川崎街道とともに主要な街道でした。この鶴川街道については江戸時代の時点の道路名称がまちまちで、矢野口方面では、江戸道、大山道という呼び名が多く、百村から坂浜地域では、江戸道、大山道、小野路道、相州道などと呼ばれていました。これらの名称は目的地を指して呼んだ名称であり、場所によって様々でしたが大山道、江戸道という名称が最も多く見られます。

江戸時代の大山道を調布から町田方面に向かってみていきましょう。その道筋は、当時の下石原宿みちすじの東端、現在の調布市小島町一丁目25番地先の甲州街道から分岐する部分しもいしはらじゆくを起点としています。ここから南下して、府中崖線がいせん（ハケ）を下り、現多摩川三丁目付近で多摩川の矢野口の渡しに接続しました。矢野口の渡しを渡って矢野口村に入ると、渡船場道とせんばみちといわれた旧道に接続します。この渡船場道を通して矢野口村の集落に入りました。堤防近くの渡船場道沿いには、文化13（1816）年造立の馬頭観世音塔（稲城市指定文化財）が建っており、台石には矢野口村をはじめとする近郷20か村の村名が刻まれています。旧道を利用して矢野口の渡しを渡った人々の旅の安全と江戸時代の農村に普及していた馬の安全・供養などのために建てられたものでした。渡船場道を進むとやがて八王子道（川崎街道）に当たります。ここから八王子道と重なってやや西側に行き、現在の矢野口交差点付近で八王子道と分かれて西南方向に進みます。やがて長沼村の集落の中を進み、百村へと通じます。このあたりから三沢川と並行して進むようになり、坂浜村に至ると三沢川の北岸と南岸を蛇行するようにして走ります。江戸時代の地誌『新

編武蔵風土記稿』の坂浜村、百村の項によると、江戸道という往還が村内をとっており、道幅は9尺（約2.7m）から3間（約5.4m）までという記載が見られ、当時ではむしろ八王子道（川崎街道）より広がったこととなります。坂浜村を過ぎると、西南に位置する町田市域の黒川村に至り、さらに小野路村・鶴川村を^{おおやま}通って、大山（現神奈川県伊勢原市）へ通じていました。

江戸時代の大山道は、上記のルートのほか、矢野口の渡しから現在の弁天通りを^{たゆうざか}通って、妙覚寺・威光寺に沿って太夫坂を抜けて細山方面に至るルートと鶴川街道の坂浜・鶴巻で分岐して、平尾村を^{たまがわらばし}通って大山に至るルートがありました。大山という目的地に向かう道がそれぞれ大山道と呼ばれたようです。

大正時代に入ると矢野口の渡しの渡船場が上流に移動したために、それに接続する渡船場道も付け替えられることになりました。大正7（1918）年12月、約500m程上流に新規の矢野口の渡しがつくられ、そこから渡船場道が現在の矢野口交差点のところへ通じました。現在の玉城湯前の旧道がこれにあたります。さらに昭和10年11月には、新旧の矢野口の渡しのちょうど中間に多摩川原橋が架かり、橋に接続する道路が現矢野口交差点に向かって建設されました。これが今日の鶴川街道です。

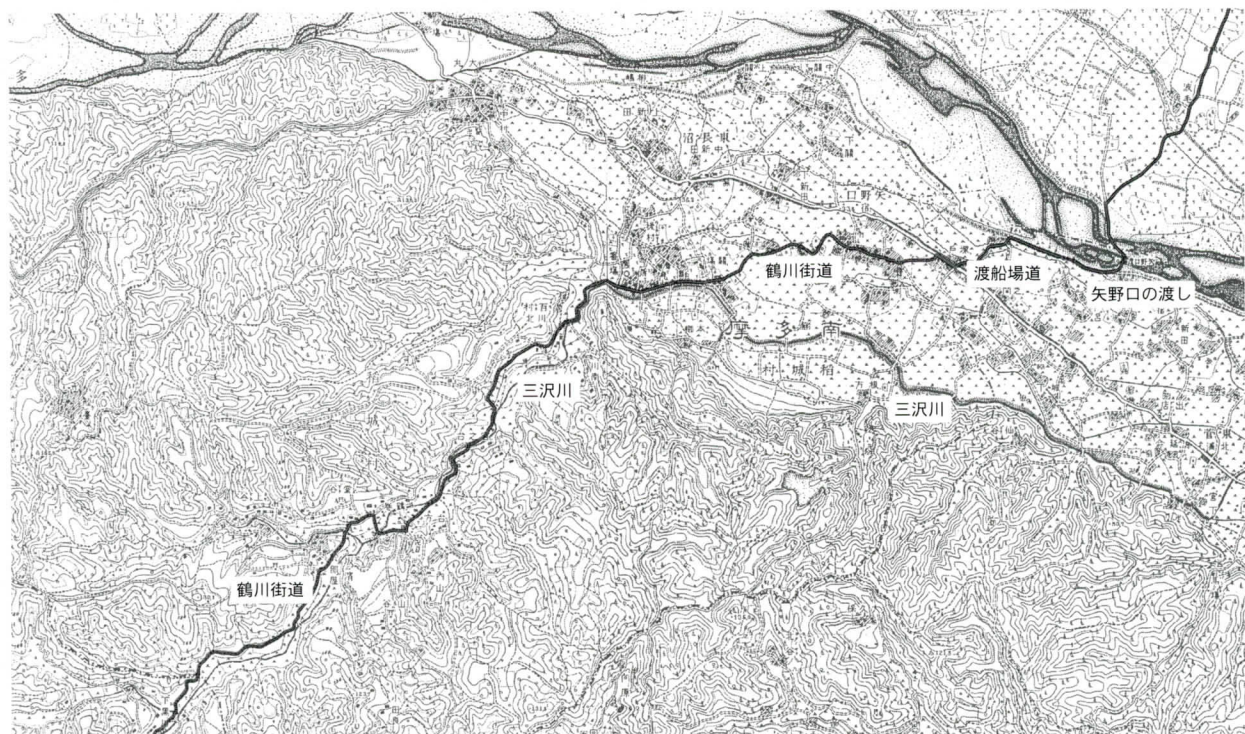
江戸時代以来悪路に悩まされ、曲がりくねった鶴川街道が、改修されるのは昭和の時代に入ってからです。農業恐慌時の農産物価格の下落による農村救済事業として、昭和5（1930）年頃に鶴川街道の改修工事が行われ、直線的な道路に^{きょうこう}拡幅されました。この改修された鶴川街道の脇には、現在でも曲がりくねった旧道の様子をあちこちで見ることができます。参考文献、『稲城市の地名と旧道』（稲城市教育委員会）



旧渡船場道沿いに並ぶ馬頭観世音の石塔



大正7年に造られた渡船場道



鶴川街道（大山道）の道筋（明治39年測図より作成）